

# アラブの女たちを差別的視する 賈春觀光は許さない!

## 賈春觀光—この恐るべき醜い実態

韓国—キーリンは、公認・非公認合わせて1万人以上、日本人觀光客の94.3%が男(11)。フィリピン—オスピタリティガールズがマニラ觀光を支える。ここでも男の率が94.3%。タイ—マッサージガールと彼女らは呼ばれる。外債收入の第3位が觀光。台湾—ニニも日本人觀光客の93%が男……東南アジアへの「賈春」ツアー、ツームは全く収入を見せていない。それどころか、毎年觀光客(殆んどが賈春目的の男たち)は増え続けている。アジアの国々の中で、最も急速に経済成長を成し上げたその経済力をバックに、大っぴらに女を買うために海外へとくり出す日本の男たち。「バンコク市内のトルコ風馬に足をふみ入れた時、一瞬、その場の情景が正視できず、足がすくんだ。暗く、広い空間に、20名以上の男性が一齊に腰を下ろして立っている。ホールの一方には、そこだけ照明が明るいチャウエインドーの、赤いショウテクンを敷いたひびだんは、女性が10名以上も、あたかも商品として鎮座(?)していたのである。」「台湾という所は、ホテルへ日本人觀光客が着くや、ボーイの第一声が『才客サン、イイ女イルヨ、今夜ドウヨ、ロビーに降りる』と、ポン引きが『デパートガールイルヨ、二万デイイハ、タクシーに乗る』と『友達!イイ女イルヨ、ドウグ』食事に行っこも……、親戚、和人の紹介の現地人も……etc.と二へ行、こも二の調子」(現地レポート資料より)

賈春觀光は、金で女を自由にするなどに何の痛みも感じない差別意識と他民族への抑圧が重なるなどに至る。日本人の男の最も醜い姿のあ

らわれだ。もうこれ以上、賈春觀光を許してはならない。帝国主義者、独裁者の圧制の下、二重三重に抑圧されいろいろアジアの女たちの声に応え、賈春觀光反対の広沢な声をあげいかねばならない。

## 賈春觀光をめぐる政治的、経済的背景

賈春觀光は、主にオーナーに日本の賈春東南アジア諸国への経済的侵略と表裏一体のものとしてある。60年代以降日本は新たな市場と資源、昔、劳动力を志す東南アジアに進出し、政治的経済的に支配下にいった。日本企業は東南アジア諸國の人口を法外に低廉金、低廉料でこき使、これまでの多くは女子労働者であった。日本の経済的収奪の結果、表面的繁栄の下で民衆の生活は貧困を極め、娘の身売りという形で賈春婦、日本人の環境にさらされてしまったのである。日本の収奪をされ、貧困を生みだし、表層せざるを得ない状況を作りだしていったのが、日本は、東南アジアの女性を、一方では労働力としてこき使い、一方で環境、表層婦として利用してまわるのである。

この背景にはオニ次大黙示「大東亜共榮圈」の名のもとに日本が東南アジア諸国を軍事支配し、大量の強制連行、徴用、虐殺を行は、これまでの民族差別があるのである。日本民族を他のアジア民族より優秀なものとし、日本が支配することがアジア諸國のためにもなると強弁してきた。当の差別意識は未だ日本人に根深く存在し、だからこそ

# 東大抗議行動委員会

日本の観光が世界的である、東南アジアの女性金で最も注目してしまった。

**(二)の問題**として、観光觀光は東南アジア諸国の國策としてすすめられているといふことである。日本の侵略以来、東南アジア諸国は非常にいわばて政治経済体制を確立している。外資系企業に資源と収益をすくい上げられ、自國経済が確立され、国家財政を大半に觀光收入に頼る、といったのである。日本人觀光客がとりわけ観光する、これがいくつも、經濟を支えているのである。東南アジア諸国の中では、日本のハイテク技術が豊富で、東南アジアの不満を抱えつけ、観光觀光を告発する材料となり強烈な反応の正統である。

**(三)観光觀光**、日本の觀光会社による作られたマーケットであるといふことだ。日本の大手の觀光会社は世論の抗議をかけたため、観光觀光用の子会社を作り大きな収益をあげてある。現行、東南アジアへのハイテク化客であるが、これだけカリクリかねる。日本の人々が東南アジアへの旅行に行くと、ほとんど女を買ひ。男女混浴場に着しE金のうち、女のみに入るにはごく一部、大洋半地元の業者と日本の觀光会社に入るものだ。この金がもうからこそ東南アジアへの旅行は安いのである。手に金を喰らうものにして商法だ。

観光觀光は「現地での問題」ではない

観光觀光は、以上述べたように、日本の経済侵略、並みに問題として東南アジア諸国の國策を背景にして、觀光の論理に躊躇せずに構造的なものである。しかし問題ではまだある二点ある。一つは、いかに観光觀光ハイテク化されても、ものでかい、もうけろへ日本企画がかりでありますと、観光を行なう際は日本人が選ぶよりは選じてほしいこと。そして今一つは、

觀光觀光に現地での問題が付けてくる。我々の日常生活は住民第一第3回の關係の問題であるといふことだ。本来士の人生の中でもあるべき性別、「生理性」、一著、「女性性」=母性といつて形で分断されてきた。「女性性」である、妻、母は、1人の男への貢献となり、その母性を以て母性外のセックスを禁じられるからに、「妻性」「母性」を与えられ、母性神話、といつて、それがめぐられてきたのだ。「女性性」=母性はそこにはまだままである。男の性的欲望へハコとして存在する、観音の本尊の1つはニニである。女の中に二の子とお説がちこまれてあるからこそ、日本の女、妻たちは、觀音觀音に行く夫を見送る、ときだ。

観音を生むたる二の子とお説は、実際に觀音に行こうが行くまいが、ほとんどの男性たちをたらえてしまう。妻にすませ、友達と2つ3つと女たちと「人情」は様のとも、ホルム開拓、ビニール本上の女は、男など、女性的欲望の対象物として、まさにモノといふのである。費用のせ、セックス用のせといふ線引きがそこにはある。この日常的な構造に目を向けてF.I.R.L.、観音の本尊は悟れないのである。

女の体は商品ではない！ 人格から切り離して肉体の性を切り落とし山へもこうされん！ それらは、女の中の解釈を離れて立場から、観音觀音に反対する。

アマゾンセセセセの痛快を自らの痛快として。自らの痛快を聞くの女たちと共有しよう！ 一人でも多くの方の声をあかられんことを説き至る。

1980年 12月5日

東大 女解放研究会